

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

北陸の空に宇宙を描き、

次世代の絆を育む

北陸支部長 笠原 禎也 (平1年卒)



1. 京都から金沢へ——24年の歩み

2021年春に北陸支部長を拝命してから、早いもので6年が経過しました。北陸支部長として2度目の寄稿をさせていただきます、1989年(平成元年)卒の笠原禎也です。

私は、木村磐根先生のご指導のもと、1989年に学部を卒業、1991年に修士課程を修了しました。博士課程に進学しましたが、翌1992年に助手として採用いただき、京都大学電気系教室のスタ



ッフに加わることとなりました。木村先生のご退職後は、佐藤亨先生の研究室で助手を務め、2002年4月に金沢大学へ異動しました。

現在は、金沢大学のICT基盤を支える学術メディア創成センター長を拝命しつつ、理工研究域先端宇宙理工学研究センターを併任し、大学運営と研究・教育の現場を走り回る日々を送っています。早いもので京都を離れてから20年以上、北陸の厳しい冬にもすっかり慣れましたが、実直に目の前の課題を一つひとつこなしていくスタンスは、京大電気系時代から変わっていないつもりです。みなさまもご承知の通り、昨年6月15日に、洛友会の会長でもあった松本紘先生がご逝去されました。私の所属していた木村研と松本研は、合同研究会や海水浴な

ど、諸行事を通じて極めて密接な交流があり、私は松本先生からも多くの刺激をいただきました。実を言うと、松本先生と私は、誕生日、干支、血液型、そして出身地(奈良)までもが全く同じという、ちよつと驚くような共通点があります。それだけに、先生の持つ圧倒的な先見性とリーダーシップは、駆け出しの研究者であった私にとって大きな目標でした(が、まだまだ足元にも及びませんが)。松本先生のご逝去に深い喪失感を覚えるとともに、先生の薫陶を受けた一員として、その「志」を次世代へ繋ぐことに、微力ながらも貢献したいと静かに噛み締めております。改めて、松本先生の御冥福をお祈り申し上げます。

2. 能登半島地震と「絆」としての情報通信

前回の寄稿からの3年間、北陸は新幹線の敦賀延伸に沸く一方で、2024年1月に能登半島地震という厳しい現実と直面しました。学術メディア創成センター長としての私の責務は、まず本学のICTインフラの状況把握で

した。元日午後の激震というタイミングから、能登に帰省していた被災した教職員も数多く、情報の集約には困難を極めました。幸い学内の主要なICTインフラに致命的な被害はありませんでしたが、

能登半島に設営された本学の研究施設とつないでいたネットワーク専用回線は断線し、一時期はSatLinkを用いた衛星通信網で代替運用することとなりました。平時は8m/s程度の遅延な回線が、衛星経由で40m/s程度まで増加しましたが、非日常下でも「繋がる」ことは何物にも代えがたく、「情報通信」が単なる利便性の追求ではなく、社会を繋ぎ止める重要な「絆」であることを再認識しました。

現在、我々は、能登地域の復興・地域活性を視野に入れた、成層圏を飛行する通信基地局「HAPS(高高度プラットフォーム)」を用いた「能登HAPSパートナープログラム」にも参画し、この地域ならではの新たな取り組みに着手しております。新たなICT技術の利活用と学術利用に加え、地域復興を支える「実学」に活かせることで、工学は社会に役立つナノボ、という先輩方の教えのもと、成果創出につながればと考えております。

3. 巨大衛星プロジェクトから超小型衛星の時代へ

木村研の学生時代に関わることになった地球磁気圏衛星「あけぼの」から始まった私の宇宙科学分野への参画は、その後、地球の放射線帯内部を観測する「あらせ(E

RG)衛星のプラズマ波動観測器のPI(主任研究者)という役割に結びつきました。また、金沢大学異動前から、松本先生を筆頭に取り組んできた日欧協力の水星探査衛星「BepiColombo/みお」が、この冬にいよいよ水星周回軌道に投入されるという歴史的な瞬間が近づいております。「みお」衛星は、開発着手から実に四半世紀を超える歳月をかけてようやく本格観測が始まろうとしており、地球と全く異なる世界の観測データが届く日を心待ちにしております。

宇宙開発の世界では、一つの科学衛星の開発に10年近い年月を要することは珍しくありません。こうした巨大プロジェクトは、その規模ゆえに一人の人間が担当できるのはプロジェクトのほんの一端で、特に学生に至っては在学中の数年間に、ごく限られた断片しか経験できません。これに対し、金沢大学で学生たちと共に進めている超小型衛星プロジェクトでは、学生が在籍する数年間の間に、設計・開発から打上げ、そして衛星運用までの一連のサイクルをすべて経験できることを標榜しています。初号機のX線突発天体監視速報衛星「こよう」は、2023年12月に打ち上げられ、現在も運用中です。続く2号機「IMPACT」計画では、衛星の頭脳となるオン

ボードコンピュータ(IBC)に人工知能(AI)機能が搭載できるAI-IBCを独自開発し、衛星そのものの制御や、宇宙プラズマ環境計測データの機上処理を、AIの力で実現するミッションに挑戦中です。

人工衛星という宇宙空間の孤立環境下で、すべて自給自足してミッションを完遂する「ものづくり」を、学生が全体像を把握しながら主導するこの取り組みは、極めて教育的効果が高いと感じています。京都大学電気系教室で学んだ「未知を切り拓く野心」を、金沢の地で次世代に少しでも伝えられればと考える次第です。

4. 北陸支部の現状——濃密な絆を守る

支部長として足元の活動に目を向けますと、地方支部ならではの課題があります。当支部では年に1度、電気系教室から恩師となる先生をお招きして、総会・懇親会を開催しておりますが、参加者は毎回10名前後と、こじんまりとした集まりです。北陸地区への就職者が少なく、若手の入会がなかなか進まないのは切実な悩みです。

しかし、少人数だからこそ、卒業年度の壁を越えた極めて密度の高い対話が生まれます。電気系教室で同じ空気を吸った者同士が、年齢に関わらずフラットに語り合

う、この「濃密な絆」こそが、地方支部の持つ真の価値ではないかと考えます。若い世代の皆様には、ぜひこの扉を気軽に叩いていただき、効率や規模だけでは測れない北陸での「知のコミュニケーション」を共に継続していただければと願っております。

5. 結びに代えて

とりとめもなく書き綴ってまいりましたが、電気系教室で学んだ真実を追い求める真摯な姿勢、社会を動かす情熱的な志を、私なりに曲がりなりに引継ぎ、学生と向き合う日々を大切にしたいと思っております。

北陸の空を見上げれば、そこには常に、先人たちが見つめていたものと同じ、無限の宇宙が広がっています。困難な時代ではありませんが、電気工学の新たな可能性を信じ、北陸から世界へ、そして宇宙へと新たな「IMPACT」を少しでも発信できればと思います。皆様には、今後とも北陸支部への温かいご関心とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

教室だより

2025年度電気系

野球大会

本年度も例年と同様に野球大会を開催することができました。今年度も多くの研究室の方に参加していただき、盛況のうちに終えることができました。

研究室としては、薄研究室、萩原研究室、阪本研究室、吉井研究室、松尾研究室、中村研究室、海老原研究室、小嶋研究室、篠原研究室、米澤研究室、白石研究室、竹内研究室、木本研究室、電子材料物性工学研究室、船戸研究室、浅野研究室、量子電磁工学研究室、Menaka研究室の計18もの研究室に参加していただきました。

この野球大会を通じて、研究室に配属されたばかりの学部4年生と仲を深めることができただけでなく、研究室の垣根を越えた交流をすることもできたかと思えます。



本大会の順位は、1位が松尾研究室、2位が船戸研究室、3位が白石研究室となりました。

松尾研究室には来年度の野球大会の幹事を務めていただきます。来年度の野球大会も、さらに活気に満ちたものとなることを期待しております。

最後に、本年度の大会開催および運営に際し、多くの皆様からご理解とご協力を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。また、本年度も洛友会よりご支援を承りました。ここに深く御礼申し上げます。

船戸研究室
M1 小田切佑悟 (令7年卒) 記



第22回電気電子工学科 交流会の開催

本年度の電気電子工学科交流会についてご報告いたします。第22回を迎えた今回の交流会は、2月16日(月)にカンフォラで実施いたしました。本交流会は毎年、研究室配属を間近に控えた電気電子工学科3回生が教員の皆様との距離を縮める機会として企画・運営されており、電気電子工学科4回生の有志7名が幹事として取り

まとめを担っております。本年度も、先生方ならびに洛友会からの温かいご支援とご協力を賜り、学生と教員の皆様が直接交流できる貴重な場を実現することができました。

交流会は、先生方と学生が対面で語り合う立食パーティー形式で行いました。開始直後はやや緊張気味の学生も見受けられましたが、先生方の親しみやすいお話しぶりに促され、会場全体が次第に打ち解けた雰囲気になっていきました。学生の側から自発的に先生方へ話しかける光景も随所で見られました。参加した学生からは、「多彩な研究分野の先生方のお話を伺い、自分の視野が大きく広がった」「研究室での日々だけでなく、大学院修了後のキャリアについても先生方ご自身の体験を踏まえたお話が聞いて大変参考になった」といった前向きな感想が数多く寄せられました。

このような意義ある会の運営に携わることができ、幹事一同大きな喜びを感じております。来年度もさらに充実した交流の場を提供できるように、現在後輩への引き継ぎを鋭意進めているところです。結びにあたり、交流会にご出席・ご協力くださったすべての先生方と学生の皆様に深く御礼申し上げます。あわせて、本交流会の意義

をご理解いただき、長年にわたりご支援を続けてくださっている洛友会に心からの感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。



第22回電気電子工学科交流会幹事代表 酒井 工(令8年卒) 記

令和7年度卒業生の進学就職状況について(報告)

電気工学専攻長

吉井 和佳

電子工学専攻長

白石 誠司

通信情報システムコース長

橋本 昌宜

電気電子工学科長

下田 宏

令和7年度の電気系教室卒業生の進学就職状況についてご報告いたします。まず最初に、今年度の就職に際しましても洛友会会員諸兄諸姉より例年と変わらぬ多大なご支援を賜りました結果、就職希望学生の就職が無事に決定致しましたことに関して心から御礼申し上げます。

令和7年度の電気電子工学科(学部)ならびに工学研究科電気工学専攻、同電子工学専攻および情報学研究科通信情報システムコース(以上修士)の進学・就職状況を表に示しました。

まず、工学研究科電気工学専攻・電子工学専攻の進路・就職に関しましては、14名が博士後期課程に進学し、51名が就職いたしました。産業界全般に亘って比較的景気が安定している状況を反映して、電気系教室に対して非常に多くの企業から以前と変わらぬ求人を見出し、最終的には、就職希望者数に対しほぼ100%の就職率を得ることができました。就職先は、昨年と同様に、電気・通信関連企業に加えて、自動車・機械メーカーや重工業関係企業の志望者が多い状況です。ただ、なぜか電力関係への学生の就職数が減少しました。

学校推薦に関しては、本年度より推薦枠と一般枠と間の交通整理をやめ、学生の自主的な活動に

任せの方針にシフトしました。これは、推薦枠応募でもジョブマッチングという名の実質的な選考が行われる場合や、自由枠応募でも最終的に「後付け推薦」が要求される場合が主流となっている現状を踏まえたものです。この方針変更による大きな混乱はなく、ほとんどの企業の方にもご理解いただけたとともに、学生にもおおむね好評でした。結果的には、約6割の学生が何らかの形で推薦を利用して就職しました。また、表には記載していませんが、博士後期課程については約半数強が民間企業に就職、残りが大学の助教・博士後期課程学生の受け入れに関して、企業も積極的に間口を拡げてくださっている印象です。博士後期課程については、修士から5年

一貫の連携教育プログラムを生かして、早期から博士の学位を目指した研究に没頭し、国内外の学会で活躍する学生が増えています。情報学研究科通信情報システムコースおよび電気電子工学科に関しましては、同様に多くの学校推薦枠を頂戴し、また見学会等でOB・OGの方々の強力なご支援により、多くの学生が希望する企業に就職しております。特に、学部卒で就職をする学生のために、推薦枠を修士と独立に設けていた

だいている企業もあり、大変ありがたく思いました。通信情報システムコースの内訳をみますと、専攻の専門性に近い企業への回帰が感じられます。具体的には通信や半導体に関連する企業への就職が堅調です。また、ソフトウェア、金融、サービスプロバイダ、コンサルティング等の業種に就職する学生おり、多様な業種での卒業生の活躍が期待されます。

以上、令和7年度卒業生の進学就職状況をご報告するとともに、会員の皆様のご厚意とご配慮に心より感謝申し上げます。

教員の異動

昇任

(令和7年6月1日付)

・ 電子工学専攻

井上 卓也 准教授(ナノプロセス工学)

(令和7年7月1日付)

・ 電気工学専攻

大島 諒 准教授(極微電子工学)

金子 光顕 准教授(半導体物性工学)

(令和7年10月1日付)

・ 電気工学専攻

曾我部友輔 准教授(超電導工学)

令和7年度卒業生進学就職状況
工学研究科(電気工学、電子工学)、情報学研究科(通信情報システム)、電気電子工学科

修了, 卒業者数	修士	学部	進学・就職先
進学	14 4		京都大学工学研究科電気系専攻博士後期課程 京都大学情報学研究科通信情報システム専攻博士後期課程 72 京都大学工学研究科電気電子デジタル理工学専攻修士課程 22 京都大学情報学研究科通信情報システムコース修士課程 4 京都大学情報学研究科知能情報学コース修士課程 4 京都大学情報学研究科システム科学コース修士課程 5 京都大学エネルギー科学研究科エネルギー応用科学専攻修士課程 4 京都大学エネルギー科学研究科エネルギー基礎科学専攻修士課程 4 京都大学エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻修士課程 4 東京大学工学系研究科修士課程 1 東京大学情報理工学系研究科修士課程 1 奈良先端科学技術大学院修士課程 1 東京科学大学
小計	19	121	
官公庁等		1	防衛装備庁
電気関連	32		TDK、TSMCデザインテクノロジージャパン、オプテックス、キーエンス、京セラ、ソニー、ソニーセミコンダクタソリューションズ、東京エレクトロン、パナソニックオートモーティブシステムズ、日立製作所、ポッシュ、村田製作所、富士通、富士通クライアントコンピューティング、富士電機、住友電気工業、三菱電機、福井村田製作所、大日本印刷
通信・情報・放送	12	3	エリジオン、コーエーテクモホールディングス、ダイテック、日本IBM、野村総合研究所、KDDI、NTTドコモ、NTT西日本、情報戦略テクノロジー、はてな、ソフトウェア情報開発、テレビ朝日
電力・ガス	6		関西電力、東京電力ホールディングス
機械・自動車・鉄鋼	10		トヨタ自動車、本田技研工業、三菱重工業、日本軽金属、日産自動車
運輸・鉄道	1	2	ジェイエア、JR東海
化学・他製造業等			
金融・商社等	3		デロイトトーマツコンサルティング、みずほ証券、野村證券
その他	24	1	USJ、任天堂、メルカリ、野村総合研究所、三菱総合研究所、LINEヤフー、DeNA、コーエーテクモ
小計	88	7	
研究生・帰国等	5	5	未定
計	112	133	

(令和7年12月1日付)

・エネルギー応用科学専攻
川山 巖 教授(デバイスプロセス学)

・通信情報システムコース
香田 優介 准教授(デジタル通信)

(令和8年1月1日付)
・電気工学専攻
久門 尚史 特定教授(電磁回路工学)

着任

(令和7年10月1日付)
・電子工学専攻

松田 祥伸 特定助教(光材料物性工学)

(令和7年11月1日付)
・電気工学専攻

孔 暁涵 助教(電磁エネルギー工学)

転出

(令和8年3月31日付)

・電子工学専攻
正直花奈子 講師(光材料物性工学) 三重大学

中西 俊博 講師(量子電磁工学) 滋賀県立大学

・通信情報システムコース
栗野 皓光 准教授(情報回路アーキテクチャ) 名古屋大学

退職

(令和7年3月31日付)

・生存圏研究所
山本 衛 教授(リモートセンシング工学)

分野名の変更

(令和8年2月1日付)
・エネルギー応用科学専攻
プロセスエネルギー学 ↓
デバイスプロセス学

電気系専攻の再編について
(令和8年4月より)

電気電子デジタル理工学
専攻長 竹内 繁樹
副専攻長 薄 良彦

令和8年4月より、これまでの「電気工学専攻」と「電子工学専攻」は統合され、新たに「電気電子デジタル理工学専攻」として生まれ変わります。

詳細につきましては、京都大学電気関係教室技術情報誌「CUE」第55号(2026年3月刊行、<https://www.s-e.c.t.kyoto-u.ac.jp/ja/information/cue/>)の「教室通信」をご覧ください。

今回の専攻化には、デジタル化とグリーン化が加速する社会において、電気・電子・情報の融合による新たな価値創出が強く求められ

ているという時代背景がありま
す。新体制では、専攻内に以下の
3つの領域を設け、既存の研究
室の再編と新たな研究分野の創出に
取り組めます…

- ・デジタル・グリーン領域
- ・電気・システム・生体工学領域
- ・光・電子・量子領域

これら3領域は相互に連携し、
新たな講義の開講や領域交差型イ
ンターシップの実施などを通じ
て、学際的な学びの機会を提供し
ます。これにより、従来の専門分
野の枠を超えた革新的な研究を推
進し、学術の発展に寄与すると
もに産業界との連携による社会イ
ノベーションの創出にも大きく貢
献してまいります。この1専攻化
にともない、入学定員も従来の73
名から93名へと増加いたします。
電気系と同時に、化学系でも従
来の6専攻を1専攻化した「化学
理工学専攻」が発足します。これ
らの1専攻化を記念する式典が、
2026年4月16日午後4時から
船井哲良記念講堂にて開催されま
す。電気電子デジタル理工学専攻
を今後ともご支援いただきますよ
う、御願ひ申し上げます。

会員寄稿

迎賓館赤坂離宮の

ボランティア説明員

来山 征士

(昭42年卒・東京支部)



はじめに

簡単に自己紹介をいたします。
私は木造校舎の教養部で学び、学
部時代は煉瓦造りの校舎や関電記
念館で専門科目を修めました。在
学中は時計台の過激派占拠など大
学紛争のさなかにありました。卒
業論文は林千博先生、修士論文は
前田憲一先生のご指導をいただき
ました。卒業後は国際電信電話会
社(KDD)研究所に勤務し、高
能率符号化の研究に従事しまし
た。その成果をまとめるにあたり、
坂井利之先生のご指導を受けて学
位を取得しました。その後、本社
勤務を経て徳島大学に移り、教育
と研究に携わりました。
現在は迎賓館赤坂離宮のボラン

ティア説明員として活動を続けて
おり、本年で17年目を迎えます。
本稿では、この活動に携わること
になった経緯と日々の経験、さら
に迎賓館赤坂離宮の魅力を紹介し
ていきます。

一. ボランティア説明員との出会
いと研修

四ツ谷駅を出て赤坂方面へ進む
と、白い鉄柵と菊の御紋をあし
らった正門が現れ、その奥に堂々
とした迎賓館赤坂離宮が姿を現し
ます。



2009年、迎賓館は大規模改
修を終え、公務利用の再開とも
に本館・庭園の一般公開を始めま
した。その際、館内での解説を担
う「迎賓館シルバーボランティア
説明員(65歳以上)」が40名限定
で募集されました。私はたまたま

学士会報で募集記事を見かけ、大
学退職後で時間に余裕があったこ
とから気軽な気持ちで応募しまし
た。

久方ぶりに履歴書を作成し、館
長との面接に臨みました。建築の
専門知識はありませんでしたが、
「大きな声での説明には自信があ
ります」と自己PRしたところ、
幸運にも採用通知をいただきました
。長年の講義経験が評価された
のかもしれない。

採用後は半年間にわたる研修を
受けました。迎賓館の歴史や建築
に関する基礎知識を学び、実地見
学や専門家による講義も用意さ
れ、充実した内容でした。さらに
個人的にヴェルサイユ宮殿やルー
ブル美術館を訪れ、西洋宮殿につ
いて体感しました。

二. 説明員としての活動

当初、一般公開は夏季10日間の
み、かつ事前申込制でしたが、
2016年以降は通年公開とな
り、予約不要で気軽に見学でき
るようになりました。私は現在、週
2日ほど活動し、1日2コマの説
明を担当しています。説明員は持
ち場に立ち続けながら来館者へ説
明を行い、質問に応じます。

来館者は高齢者から小学生、さ
らには専門家や外国人まで幅広
く、質問内容も実に多彩です。シャ

ンデリアを前に「掃除方法は？」
「電灯はLEDか？」と尋ねられ
ることもあれば、甲冑像を見て
「Bushu(武士)とSamurai(侍)
の違いは？」と問われることもあ
ります。小学生の素直な一言に思
わず感心させられることも少なく
ありません。

時に答えに窮する質問もありま
すが、その場合は帰宅後調べ、次
回に備えます。1日の来館者は平
均2000人、多い日には
6000人を超えることもありま
す。毎日が初対面の方との出会い
であり、常に新鮮な学びの場です。

説明員の務めは単なる情報伝達
にとどまりません。訪れた方々に
「日本の迎賓空間の魅力」を感じ
取っていただくことを心掛け、歴
史や建築を分かりやすく語る工夫
をし、来館者との対話を楽しむ姿
勢を大切にしています。

三. 赤坂離宮の建設と迎賓館への
改修

迎賓館赤坂離宮の敷地は、かつ
て紀伊徳川家中屋敷の跡地にあり
ます。明治期に皇室に献上され、
仮皇居などを経て、北側12万平方
メートルに東宮御所(現本館)が
建設されました。建設には10年を
要し、1909年に完成しました。
設計・監督を務めた片山東熊は、
工部大学校造家学科の第一期生と

してジヨサイア・コンドルに学び、京都・奈良の国立博物館なども手掛けた建築家です。内装や装飾には黒田清輝、浅井忠、渡辺省亭、清川惣助といった明治美術界の巨匠が参加し、国家の威信を示す総合芸術作品となりました。

完成後、皇太子（後の大正天皇）はお住まいにはならず、1923年から昭和天皇が摂政時代を含め約5年間居住されました。戦後には当時の皇太子殿下（現上皇）が一時お住まいになったこともあり、その後1948年に国へ移管され、国立国会図書館や東京オリンピック委員会事務局などに転用されました。1974年には5年の工期と100億円を投じて改修が行われ、文化財としての価値を保ちながら新たに迎賓館として生まれ変わりました。この改修には村野藤吾が当たりました。あわせて和風別館「游心亭」が新設され、谷口吉郎が手掛けました。

四、迎賓館赤坂離宮の建築的特徴

本館は建坪約5000㎡、東西125m、南北89m、高さ23m、地下1階・地上2階の鉄骨補強煉瓦造で、ヴェルサイユ宮殿やルーブル宮殿を模範としたネオ・バロック様式です。館内の円柱にはフランス・イタリア・ノルウェー産の大理石、外壁には茨城県産真

壁石が用いられるなど、国内外の素材が巧みに融合しています。

正門上部の菊花門や旭日章の彫刻、屋根の青銅製甲冑や天球儀は象徴的であり、内部は豪華絢爛でありながら機能性も兼ね備えています。朝日の間、彩鸞の間、花鳥の間、羽衣の間など、趣向を凝らした部屋は訪れる人々を魅了します。



本館の南側には主庭が広がり、その中央に大噴水があります。周辺には、米国のフォード大統領、英国のエリザベス女王と旧ソ連のゴルバチョフ大統領による記念植樹が残されており、国際交流の舞台としての歴史を物語っています。本館の北側には前庭があり、正門に至ります。

おわりに

迎賓館赤坂離宮は、明治期の建築と美術の粋を集めた国宝であり、現在も我が国外交の重要な舞台であり続けています。



本館（主として公用4室）と庭園は予約不要で見学できます。時々、ライトアップやピアノ演奏などの催しも行われています。前庭ではパラソルの下でアフタヌーンティーが楽しめます。正門の外側には地下休憩所があり軽食ができます。和風別館の見学には事前予約が必要です。

「百聞は一見に如かず」。ぜひ一度、迎賓館赤坂離宮を訪れ、その迫力と気品を直に感じていただければと思います。

今後説明員として、この歴史的建造物の魅力をひとりでも多くの方にお伝えしていきます。

なお、京都御苑内にある京都迎賓館も事前申込により見学ができます。

瑞宝中綬章の授与を受けて

（昭44年卒・九州支部）

檜山 隆



この度、令和7年秋の叙勲にて、11月3日付で瑞宝中授章受章の栄に浴し、11月12日にホテルニュー

オータニ東京にて開催された文部科学省主催の叙勲伝達式に家内共々招待されました。当日は、勲章ならびに勲記を受領し、伝達式終了後、勲章を着装して皇居に参内、天皇陛下に拝謁を賜り、その後皇居内での記念撮影を経て、当日のすべての行事は終了となりました。当日の夜は、東京在住の子供たちが東京タワーを間近に見るレストランでお祝いの食事を企画してくれました。家内や子供や孫たちと受章の喜びを共にし、楽しいひと時を過ごすことができました。この11月12日という日は、私にとって生涯忘れることのでき

ない長く幸福な一日として刻まれました。

今回の受章は、令和6年年末の熊本大学労務課担当者からの一報「先生の名前が令和7年秋あるいはそれ以降の叙勲候補者のリストに挙がっています。叙勲申請希望の有無をお知らせください」に絡を得て、希望する旨の通知をしたことに始まり、申請に必要な業績調書、著書・論文リストなどの複数の書類の準備・提出を経て、熊本大学より文部科学省へ秋の叙勲対象者として推薦していただきました。その後、文部科学省、内閣府での審査を経て、閣議により最終決定されたものです。

私は、昭和44年3月に工学部電気工学第二学科を卒業後、昭和46年3月に大学院工学研究科修士課程電気工学専攻を修了しました。同年4月に熊本大学工学部助手に採用され、講師、助教授を経て、平成元年6月に熊本大学工学部教授に昇任、平成14年4月に熊本大学大学院自然科学研究科教授に配置換えとなり、平成24年3月の定年退職までの41年もの間、熊本大学において教育・研究に従事しました。これにより平成24年5月に、熊本大学から名誉教授の称号が授与されました。定年退職後の平成24年4月から平成26年3月までの2年間は熊本県立技術短期大学校

の校長を務めており、縁あって平成26年4月より卓越教授として熊本大学・大学院先端機構に戻り、令和4年3月までの7年間の任期を務めました。任期中は、自然科学系国際共同研究拠点長、シニアUR Aなどの職務を担当し、平成28年4月から本職を辞するまでの5年間は文部科学省の承認のもと設置した国際先端科学技術研究機構の初代機構長を務めました。熊本大学では計48年の長きにわたり、学生の教育や研究指導に携わってまいりました。後年においては、留学生センター長、国際交流担当学長特別補佐、大学院自然科学研究科副研究科長および研究科長、また、先述の国際先端科学技術研究機構構長など大学の管理・運営に関わる職務を担当することで、自己の新たな一面を発見することができたこと、教職員の皆さんや学生諸君の存在があつての私なのだとこの想いを強く感じることができたこと、これは一人の大学教員として生涯忘れ得ぬものとなりました。私が指導に携わった学生諸君、関係部署において協働して下さった教職員の皆さま、九州電力（株）など企業との共同研究でお世話になった共同研究者の皆さまに深く感謝申し上げる次第です。

私の研究活動は、学部4年時に卒業研究生として、林宗明先生の發送配電研究室に所属したことがその端緒となります。同研究室では電力系統の解析と高電圧放電現象の実験的研究が主要な研究テーマでした。私は電子計算機が使用できるということで、喜び勇んで電力系統の解析を選び、固有値解析による電力系統の安定度解析をテーマとして卒業研究に取り組みことにしました。この卒業研究をまとめたものが修士課程2回生の時に、私の学術論文第一報として電気学会雑誌に掲載されました。自身の論文が活字として印刷されたものを目にした喜びは、何事にも替えがたいものでした。修士論文をまとめたものは修士課程修了後、熊本大学に職を得た年に、同じく電気学会論文誌に掲載されることとなりました。以後、現在に至るまでに5編の英文著書、110編の学術論文誌掲載論文、101編の国際会議掲載論文として公表するに至っております。喜ばしいことに、これらの論文の引用回数は五千回を超え、現在も年間百数十件程度の引用が続いています。なお、昭和55年1月に京都大学より論文博士として工学博士の学位が授与されました。

海外における研究活動としては二度の在外研究があげられます。一度目は昭和50年4月から5月までの二か月間、日ソ間学者研究者交換協定により旧ソ連邦・モスクワ動力大学に派遣されました。修士論文の研究に取り組んでいた際、その英訳本により電力系統の過渡現象解析手法を学んだ、私が影の師として仰ぐベニコフ先生の研究室にて研究活動ができたことは大きな喜びでした。また、研究を離れてポリシヨイ劇場、クレムリン宮殿劇場など誰もがその名を知る劇場において、「白鳥の湖」を始めとしたバレエやオペラ「椿姫」など多くの演目を鑑賞できたことは、とても思い出で忘れられない思い出の一つと言えます。二度目は昭和60年5月から昭和61年9月まで、米国ニューヨーク州北部の小さな町ポツダムのクラークソン大学にリサーチフェローとして雇用されたことによります。ニューヨーク州内のナイアガラモホーク電力会社を始めとして、七つの電力会社の配電用変電所や配電線での高調波の測定と解析に関する研究に従事できたこと、これは実際の系統を対象とした実験的研究であり、あとに続く九州電力（株）総合研究所との共同研究による三次元位相空間情報を用いたファジイ論理型電力系統安定化装置の開発と実設備としての実装に繋がるものとなりました。また、研究とは別にレークプラシッドを手始めに、オタワ、モントリオール、トロント、ナイアガラ、ケベック、ワシントンDCなど多くの街を訪れ、博物館、美術館、記念碑、砦などを家族と見物してまわりました。いずれも自家用車での長距離の移動でしたが途中のモーターホテルでの宿泊、各所での食事など、非常に多くの出来事が研究成果と同様にいまでも鮮明に思い出されます。

帰国後の研究の大きな転換としては、電力システムへの知識工学の適用に関する研究に先鞭をつけたことが挙げられます。先述のファジイ制御による電力系統安定化装置の開発、ニューラルネットワークを用いた太陽光発電システムの最大電力追従制御方式の開発、マルチエージェント方式による多様な電源構成を持つ電力システムの運用・管理・制御のインテリジェント化など、多種多様な研究に取り組みました。後年、その業績に対して、IEEE（米国電気電子学会）より、会員最上位のフェローおよび終身フェローの称号が授与されました。また、この間、主任指導教員として外国人留学生17名、社会人学生4名を含む23名の博士後期課程学生に博士（工学）、博士（学術）の学位を授与できたことは、研究における世代交代や継続性を考えるうえで大きな喜びでありました。

永年にわたる私の教育・研究生活を振り返ってみれば、この上なく幸せであった様に思います。卒業研究室への配属から熊本大学での職を得て、辞するまでの六十年にならんとするその時々においてお世話になった皆さまへの感謝の言葉をもって、この稿を締めたいと思います。ありがとうございます。した。

**JRは統合すべきー
ある先輩の思い出**
橋本 道哉
(昭33年卒)



国鉄が民営分割される時に三菱電機の幹部の1年先輩の32年卒の桜田先輩と議論しました。彼とは大学3年の時に知り合ってから色々相談に載ってもらい、三菱電機に就職され、私は国鉄に就職しましたが不思議な縁で友好関係は継続していました。当時は一年違いでも仲間として対応してくれました。桜田先輩は今の国鉄は組織に余分な脂肪とコレステロールが

溜まり過ぎており、分割と言う荒療治を行えば余分な脂肪とコレステロールが取れる。さらに民営分割を続けていると余分な脂肪とコレステロールが溜まるので、その時に統合して除去すればよいと説得されました。仕事を邪魔する組合も無くなり、経営的には桜田先輩の予言は見事に的中しました。桜田先輩のような考えを持っておられる人は他に居ませんでした。

私は国鉄の民営分割には反対でした。鉄道は線路だけでなく、電力供給システムも通信管理システムも東京社の中央指令で一括管理されており、これらを分散して管理すると非効率になること、及び鉄道技術の開発も、技術開発資金も分散されるので非効率であり、日本の鉄道技術は世界で二流国になると言って国鉄の民営分割に反対していました。自動運転も道路上よりも線路上の方が遥かに容易なのに鉄道は遅れています。高市総理が言われるように守りのイノベーションは何も生み出さず、攻めのイノベーションだけが成果を生み出します。

最近のJRの架線停電事故は酷いです。お役所から嚴重注意を受けました。こんな不名誉は鉄道電化の導入以来経験がありません。こんな架線事故を起こして乗客に迷惑をかけるようでは電気鉄道の

信頼性を大きく損なうものです。鉄道電化の導入時から架線システムは安定していましたが今頃になってこんな事故を連続して起こすようでは現在の架線保守システムだけではなく、架線技術者の意識が欠如していると思います。付け焼刃的な対策ではもう効果が無いと思います。

リニア新幹線も国鉄時代に開発されましたが、フィージビリティスタディも行っていないので高価な道楽になりました。民営分割されていなかったらリニア新幹線の建設はスタートしていなかったと思います。JRには余分なコレステロールと脂肪が溜まっています。

海外鉄道への技術協力ができる人が極端に少なくなっています。世界でも米国以外は全部国鉄です。日本のような小国で鉄道が民営分割されたままでは不自然です。

私は無駄な脂肪とコレステロールが溜まったJRを統合して新しい国鉄に生まれ変わる時期が来ていると判断しています。

JRを統合する、少なくともJRの電気技術者を統合して一本化する時期が来ていると思っています。このままでは鉄道二流国です。現在のJR幹部が互いに知り合いが居る間に国鉄に統合する最

後の機会だと思っています。無駄な脂肪とコレステロールが除去された国鉄に生まれ変わる絶好の機会だと思っています。

支部だより

九州支部講演会及び懇親会報告

令和8年1月31日(土) 18時30分より、福岡市博多区のオリエンタルホテル福岡博多ステーションにおいて、九州支部講演会および懇親会を開催いたしました。今回はハイブリッド形式(対面+リモート)での実施となり、会場に10名、リモートで1名の計11名が参加されました。本会では、定例の懇親会に加え、熊本大学名誉教授 檜山隆さま(昭和44年卒)が令和7年秋の叙勲において瑞宝中綬章を受章されたことを受け、記念講演をお願いしました。



懇親会では、川内野幹事(平成4年卒)の司会のもと、工藤支部長(昭和62年卒)の開会挨拶により幕を開け、原田さま(昭和50年卒)による乾杯のご発声をもって始めました。しばし歓談を挟んだ後、檜山さまより「令和7年秋の叙勲―瑞宝中綬章の授与を受けて―」と題したご講演をいただきました。叙勲に至るまでの経緯に加え、これまでの研究生活と人生の歩みについて、貴重なお話をお聞かせくださいました。大学時代の思い出に始まり、技術発展の歩み、モスクワでのヴェニコフ先生との交流、アメリカでの研究生活など、国際的に活躍された足跡が紹介されました。とりわけ、サムエル・ウルマンの詩「You are」の一節をご自身の人生に重ねて語られた場面は、参加者の胸に深く響き、心に残るひとときとなりました。

懇親会では、参加者全員が杯を交わしながら終始和やかな雰囲気の中で交流を深めました。話題は、福岡国際空港の新たな取り組み、海外の動向、各自の近況、さらには昨今の時事問題にまで及び、多岐にわたりました。限られた2時間では語り尽くせないほど充実したひとときとなりました。最後に、市川さま(平成5年卒)



より閉会のご挨拶をいただき、本会は盛会のうち幕を閉じました。今後も世代や地域を越えて、多くの会員が気軽に参加できる場を設け、九州支部の絆をより一層深めてまいりたいと存じます。

田中 仁志(平22年卒) 記

訃報

昭28	猪口 敏夫	8・1・21
昭30	林 泰夫	8・1・28
昭30	天谷 規夫	8・1・14
昭30	岡田 隆夫	8・2・1
昭30	藪内 敬一	7・8・8
昭33	中山 道夫	8・1・14
昭35	角 忠夫	7・11・18
昭36	塩月 安朗	7・9・21
昭36	加藤 一宏	8・1・15
昭37	田室 泰治	8・2・15
昭41	射場 大造	7・9・18
昭43	中野 貞彦	7・10・13
修45	中村 脩	

以上の方がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。